

前橋市総合教育プラザ

幼児教育センターだより

第68号 平成30年6月発行



「学び」は積み重ね

前橋市教育委員会

教育長 塩崎 政江

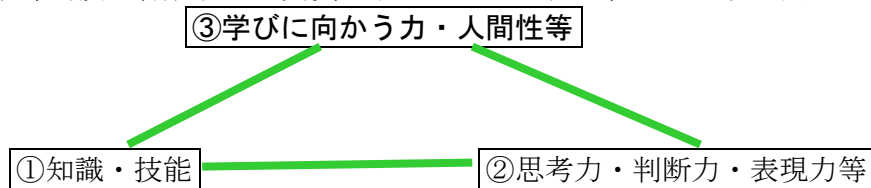
ある小学校4年生の算数の授業を、幼稚園の先生が参観した時のこと。

三角定規を忘れた児童Aさんに、担任の先生はそっと自分の三角定規を渡して、Aさんが困らないようにして下さった。授業が終わった後の話し合いで、Aさんを幼稚園の時に担任した先生が、「Aさんには、自分で困ったら、自分で伝える力は育っていたはずですよ。」と発言。すると、周りの先生から「困った時には自分から『貸してください』と言うとか、知恵を働かせて事前に隣のクラスの友達から借りておくとか、本人が自分の力で対応の仕方を学ぶチャンスだったかもしれない。」「その子の事を思ってやっているつもりだけど、もしかしたら育ちの邪魔をしていることがあるかもしれない。」など大いに盛り上がりました。

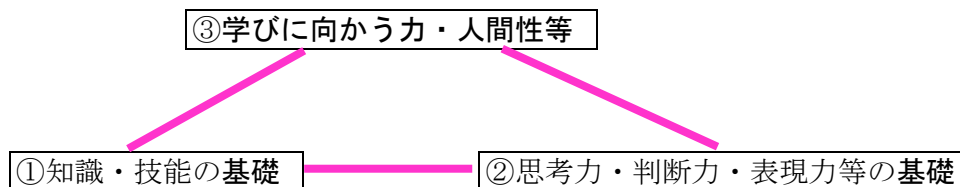
「学ぶ」ということは、「これまで理解し身に付けていたことと、新たな気付きがつながり、理解が広がり深まる過程であり、それによって新たな活動や思考が出来るようになっていく過程である」（『幼児期から児童期への教育』より）と言われます。学びは一人一人の子供の中で、日々積み重ねられていくものであるはずですよ。

新学習指導要領では、幼保と小学校などの学校間連携を重視しています。保幼小連携という、就学時の情報交換に特化しがちですが、幼児期の学びが児童期につながり、きちんと積み重ねられているだろうかという議論が必要だと思います。

新学習指導要領で育成すべき資質・能力の三つの柱は、このような図で示されます。



これを幼児教育に当てはめると、このようになります。



①②については、「基礎」とありますが、③については小中学校と同じです。この「学びに向かう力・人間性等」は、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」というその子の人生そのものにかかわる内容です。幼児期の学びの中で「学びに向かう力・人間性」が生まれ、それはそのまま小学校以降につながっていくことなのでしょう。幼児教育に関わる方々は、幼児期の遊びを中心とした体験が、その後の人生に大きくつながるきわめて大切な「学び」であることに、誇りと自信を持って取り組んでほしいと願っています。